

静岡県現地支援調整本部
派遣者報告（第9次隊員）

所 属 商工振興課
職氏名 主幹 榊原 和浩

第9次要員は全26名（静岡県職員 14名、市町職員 12名）

- 派遣先は、岩手県遠野市、山田町、大槌町
- 市町職員は、山田町（7名）、大槌町（5名）にわかれ派遣された。
- 自分は山田町に派遣となった。（県職員を含め総勢10名）

（応募の理由）

- 繰り返し流される悲惨な状況、休む間もなく働く職員を見て、単純に何かできることはないかと思った。家族には機会があれば行くからと前々から話しをしていた。多分、応募した以外の人の中にも仕事や家庭の都合がつけば応募しようと思った人は多いのではないか。
- 阪神淡路大震災の時は防災地震課、新潟中越沖地震の時は水道総務課といずれも現地に行けるチャンスのある所属であったが、結局被災状況の確認ができなかった。自分の目で被災状況を見てみたかった。

（山田町の被災状況）

- 亡くなった方約560～570人、行方のわからない方約300人（人口は約19,700人）
- 沿岸部6,000戸のうち2,600戸が全壊あるいは全焼
- 避難所28箇所、約2,300人の人が避難生活を送っている。
- 津波の被害も大きかったが、火災の被害も大きく、がれきで道路が塞がれたため、ホースをかついで配水地の水を使って消火活動にあたったが、水がなくなったあとはなす術がなかったとのこと。
- 現地はまだ焼け焦げた臭いが残っており、かなり広範囲で火災が発生した様子。
- がれきの処理はかなり進んでおり、道路はもちろん、街中も基礎だけ残っているような状況の地区も多くなっていた。（一方、大槌町はまさにがれき処理の真っ只中で自衛隊のトラックが何台も行き交っており、埃と不快なおいでマスクがなければいられない状況であった。）
- 4月初旬に電気が通電、上水道もほぼ復旧が終了
- 沿岸部ではもちろん信号や街灯はなく、夜は真っ暗になる

（業務内容）

- 山田町で静岡県隊に与えられた業務（それぞれの課に配属）
 - ・（災害対策本部）・・・各種会議の議事録作成、来訪者の確認、災害対応記録の作成
 - ・（建設課）・・・民間賃貸住宅入居の申込、被災建築物の補修申込等の受付、仮設住宅の入居事務など
 - ・（健康福祉課）・・・義援金等交付申請書整理事務
 - ・（上下水道課）・・・決算統計資料のチェック

- ・(税務課)・・・軽自動車廃車登録など
- ・(その他)・・・救援物資の受け入れ、仕分け
- 業務によっては、完全に応援部隊のみでまわしている(町職員がいっさいタッチしていない)業務もあった。(救援物資関連業務は山形県職員が担当していた。)
- 様々な自治体が同様に役場の中で業務を行っていた。(北海道函館市、池田町、大阪府、山形県、米沢市、長野県千曲市など)
- 自分は建設課配属となり、窓口業務を担当。金曜日に引継ぎし、すぐに職員の少ない土日の対応をしなければならず大変であった。(助成金交付申請の受付であったため、要綱から覚えなくてはならず、覚えの悪い自分には大変であった。)また、若い人の言葉はなんとかわかるが、お年寄りの言葉は聞き取りづらく、方言という言葉の壁に悩まされた。
- 丁度1回目の仮設住宅の抽選の時期にあたったため、建設課長さんの配慮もあり、抽選用紙の作成から、入居申込者のチェック、そして抽選当日、町長が引いた当選番号を掲示板へ記入する役をやらせていただいた。

(職員の状況)

- 業務時間は8時30分～17時30分、5月中は土日も開庁
- ・職員は土・日は交代で勤務、平日も交代で休暇を取れる状況になっている。
- 職員の中には町長をはじめ家を流されている職員も多数おり、避難所や臨時宿舎、親戚の家などから通勤している。
- そのような状況なので、職員には、昼食におにぎり、夕食に弁当が支給されていた。
- 職員2名の方が犠牲になった。1人は休暇中で自宅にいたため、もう1人は地震のあとすぐ自宅の様子を見に行ったため、津波に巻き込まれたとのこと。2人とも遺体は庁舎の地下で発見されたとのこと。
- 2ヶ月がたち、休暇が取れるようになり、慌たしさは感じず、落ち着いて淡々と業務をこなしているといった感じであった。

(派遣先での生活)

- 宿舎は役場隣の保健センターの和室、6時起床、23時消灯
- 静岡県10名、北海道池田町3名、社会福祉士2名、総勢15名で雑魚寝。基本はテント用マット1枚、毛布3枚、シュラフ1枚、10度を下回る朝も何日かあった
- 食事は、朝は県の用意したアルファ米(案外いける、熱湯で20分かかるが)、昼は役場近くのスーパーで弁当を買い、夕食は支給される弁当を食べていた。そのうち野菜が欲しくなり、みんなでお金を出し合い、サラダや味噌汁、カレーなどを作るようになった。食糧の備蓄は豊富で、静岡県が誇るほていのやきとり缶詰、はごろものツナ缶などが箱で何箱も置いてあり、つまみには事欠かなかった。
- 風呂は車で10分ほどの避難所に設置してある自衛隊風呂に入っていた。湯は熱めでバスクリン入り、5箇所のシャワー付の洗い場が用意されていた。避難所の方々と一緒に入った。(湯船には8名くらいは入れる。)
- 他の町の様子を見る時間がなかったので、何人かでわかれ4時くらいに起床して宮古市などを見てまわった。役場の近くは、勤務時間までの時間を利用して散歩した。
- ひどい生活環境だと聞いていたので、上記のような生活でもかえって快適に思えた。

(最後に、感じたことなど)

- 山田町は岩手県との連絡がとれず、しばらくの間孤立した。防災行政無線の不調が原因。停電することも考慮に入れ、あらゆる通信手段を検討しておく必要がある。
- 移動系無線、アマチュア無線が有効であったとのこと。
- 津波危険地域は孤立することを前提に防災計画を見直す必要がある。
- 食糧の備蓄場所を高台に設置する。(余談だが山田町では備蓄倉庫を高台に設けていたが、鍵が津波で流され、扉を壊して使用したとのこと。)
- 国や県は救援物資は送ってくれるが、市町が被災していることを考慮に入れていないため、時間関係なしにやたらに送ってくる。職員が被災している中、受け入れに回せる職員数も限られ休む暇がない。職員付で物と一緒に受け入れる体制ができないか。
- 救援物資受け入れは広域エリアで拠点を1箇所決め、そこから各市町に必要なものを届ける体制にできないか。システム構築は物流業者にまかせるとか。
- 自宅を改修し避難所から移って住む場合、その改修費の一部を助成する制度(岩手県)ができたが、周知が遅れ、既に改修が済んでいるケースが多く、苦情が多く寄せられた。必要な施策を素早く制度化し、周知を徹底的に行う必要がある。
- 避難所では、震災後に購入したものはレシートを持っていけば町が補助してくれるといったデマや出鱈目な噂が飛び交っており、実際に問い合わせもあった。常に正確な情報を伝えることが大事である。デマを抑える手立ての検討が必要。
- 災害対応業務ということで、通常業務とは違う体制で業務にあたらなければならないこともあり、縦の連携も横の連携も上手く行っていない業務もあった。担当者しかわからないことも多く、課の中で情報を共有すればいいのにと感じたことも多くあった。
- 防災計画通りにいかないケースも多く、電話を受けたところが担当になったということもあったとのこと。(沼津ではそんな柔軟な対応ができるとは思えないが)
- 結局本部(危機管理課)におんぶにだっこになってしまうと思われる。各班で対応できるものはそこで判断していかないと対応が遅れてしまう。
- 震災直後職員は避難所の運営にかなりの時間とられてしまう。いつ他地区からの応援職員に託していくかの見極めが必要。
- 最初は福祉部門が大変(救援物資受け入れ、義援金処理など)なので、大変な部署に必要な数をはりつけることが必要。
- 大槌町にも1時間ほどみて回る時間があったが、大槌町は山田町より災害対応が1ヶ月以上遅れている感じがした。1番大きい要因は役場そのものがないこと。そして町長はじめ4分の1の職員が亡くなっていること。庁舎が使用できない場合、代替庁舎と本部体制をいかに迅速に立ち上げることができるかが、その後の復旧のスピードに大きく関わってくる。
- 消防団員がその責任感から防潮堤の扉を閉めに行って何人も犠牲になっているとのこと。引く勇気も必要。

地震だ 津波だ 公務員も消防団員もすぐ避難

誰もが犠牲になることのない津波避難システムの構築を願います。